琉球大学学術リポジトリ

紀元前4千年紀の南中国沿岸における地域間交流

メタデータ	言語: 出版者: 琉球大学法文学部 公開日: 2016-01-15 キーワード (Ja): 紀元前4千年紀, 南中国沿岸, 殻坵頭遺跡, 多角口縁釜, 地域間交流 キーワード (En): 作成者: 後藤, 雅彦, Goto, Masahiko メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/20.500.12000/33088

紀元前４千年紀の南中国沿岸における地域間交流

後　藤　雅　彦
Masahiko Goto

The Regional Interaction of the Coastal Areas in South China of the Fourth Millennium B. C.

紀元前４千年紀の福建沿岸の殼坵頭遺跡は、閩江下流域における新石器文化の形成を辿る上で重要であるばかりか、出土遺物から同時期の南中国沿岸の人の移動と文化の交流を示す上で重要である。本稿では殼坵頭遺跡と長江下流域の杭州湾南岸の土器文化として多角口縁釜に着目し、紀元前４千年紀の南中国沿岸地域における地域間交流をめぐる問題を明らかにする。

キーワード：紀元前４千年紀、南中国沿岸、殼坵頭遺跡、多角口縁釜、
地域間交流

はじめに

東南中国の先史文化は、最近の資料の蓄積によって大いに研究が進展しており、また、高温多湿な気候と沿海地域であるという自然環境に即して、中国大陸の先史文化の中でも独自の歴史的展開を示しながら、周辺地域の先史文化との文化交流もうかがえる（第１図）。

そして、東南中国の先史文化は東南アジアへ広がる窓口として、さらに対岸の台湾から太平洋地域、あるいは琉球列島へ広がる文化交流の源流を示す地域として注目される。しかも各時期において長江中・下流域との関りと言う中国大陸における諸文化との接触・融合が認められ、東南中国の先史文化の外への拡散を追求する上で、この長江流域という中国大陸の内なる世界と

の関りが重要であると考える。

こうした視点にたつと福建沿岸の殻坵頭遺跡は閩江下流域における新石器文化の形成を辿る上で重要であるばかりか、紀元前４千年紀の中国沿岸の人の移動と文化の交流を示す上で重要であると考える。

そこで、本稿では殻坵頭遺跡について検討すると同時に、それとの関わりで長江下流域、とくに杭州湾南岸の様相を整理し、紀元前４千年紀の南中国沿岸を舞台とした地域間交流をめぐる問題について検討してみたい。

１．福建沿岸の殻坵頭遺跡と地域間交流

平潭県海壇島の殻坵頭遺跡は1985～1986年にかけて発掘が実施され、貝層が厚さ５～65cm堆積している（福建省博物館1991）。出土土器は砂質土器が全体の90％を示す。破片が多く、器形の復元可能なものでは丸底釜30点（第２図１～７）と罐18点（同８）が３分の２以上を占める。その他に壺、圏足器（豆）、碗器蓋と支脚19点が出土している。釜５・７の肩部には貝殻紋が施され、７は「く」の字状口縁に多角口縁（波状口縁）をもつ。また、罐（８）も肩部から腹部に２条の貝殻紋が施され、多角口縁をもつ。罐とされるが器形は釜と大差なく、「く」の字状口縁をもつ。以上のように殻坵頭遺跡には丸底土器の中の「く」の字状口縁をもつ釜・罐類に多角口縁が認められる。

同遺跡の報告では曇石山文化や周辺地域の新石器時代文化と比較して、地域的な特徴を有することから「殻坵頭類型文化」を設定している。その年代は復国墩遺跡の年代や曇石山文化との関わりを鑑みて、今から6000～5500年以上前としている。

そして、殻坵頭遺跡出土土器にみられる多角口縁などに着目すると沿海ルートの地域間交流として長江下流域との関わりが浮かびあがってくる。

まず、西谷大（1997）はこの口縁が六角形を呈する土器と玦状耳飾の存在

第１図　東南中国の関連図

第２図　殼坵頭遺跡出土土器
（原図：福建省博物館1991）

に着目し、「福建省から広東省における沿岸部の中期の動向は、地域によって異なり、河川を通じての内陸部の影響という概念だけでは把握できない」と指摘している。

また、林華東（1992）は長江下流域に展開した河姆渡文化の周辺地域への波及について論究する中、殻坵頭遺跡の出土遺物にみられる小型片刃石斧、釜、支脚などの土器の器種構成や紋様が河姆渡遺跡（第４、第３文化層）と共通する点[1]、多角口縁が河姆渡遺跡第２文化層や名山後遺跡などでみられることを指摘している。

東南中国沿海地域では紀元前4000年以降、「く」の字状口縁を持つ丸底釜・罐を中心とした丸底土器、壺、圏足盤を含む土器文化が出現するようになるが、出現期においても本稿でとりあげる福建沿岸は長江下流域、そして珠江三角州は長江中流域との文化関係が認められる[2]。ただし復国墩遺跡などの鉢形土器は年代も遡るものであり、丸底土器文化の出現期に対し、より始原的な土器文化が東南中国沿海地域においても存在していた可能性が高い[3]。

２．杭州湾南岸の遺跡

河姆渡遺跡は杭州湾南岸の丘陵と泥炭層の平原が交わる傾斜地に立地する。1973年に発見され、同年から1974年に第一次調査、1977年から1978年に第二次調査が実施された。文化層は約3.7mの厚さで堆積する中、４層に区分され、上から順に第１から第４文化層と番号が付されているが、第１・２層は以前から知られていた長江下流域の新石器時代文化に対応し（第１層＝崧沢文化、第２層＝馬家浜文化）、その下の第３・４層は年代的にも古い河姆渡文化と呼ばれている。以上が河姆渡遺跡の第一次調査の報告での見解であるが（浙江省文物管理委員会他1978）、その後、河姆渡遺跡の第４～１文化層までを連続した文化として捉える傾向が強くなり、2003年に刊行された報告

書もその立場にたっている（浙江省文物考古研究所2003）。

こうした「河姆渡文化」の定義に関る問題を中村慎一（1998）が的確に整理しており、時期差と地域差を如何に捉えるかが問われている。

なお、報告書では時期区分として第１期から第４期文化遺存を設定している。第１期が第４文化層、第2期が第３文化層、第３期が第２文化層、第４期が第１文化層になる。本稿では杭州湾南岸の新石器時代文化の時間的変遷を当面の問題としているので、考古学文化の捉え方は一先ず保留として、福建沿岸との関わりで、時間軸としての河姆渡第３期、河姆渡第４期も用いることにする。そしてその年代は第１期今から約7000～6500年前、第２期約6300～6000年前、第３期約6000～5600年前、第４期5600年～5300年前とされる。

そして中村によると、第４～１文化層を括る「河姆渡文化」の分布範囲として、杭州湾南岸を西から東に主要な遺跡をあげると、蕭山跨湖橋遺跡、慈渓市童家嵒遺跡、余姚羲架山・淄山、寧波八字橋遺跡・慈湖遺跡、奉化名山後遺跡、象山塔山遺跡、舟山群島の白泉遺跡・孫家山遺跡などがあげられる。

浙江省跨湖橋遺跡は1990年と2001年および2002年に発掘調査が実施されている（浙江省文物考古研究所他2004）。河姆渡文化に先行する今から8000年～7000年前に位置づけられ、跨湖橋文化が命名されている。長江中流域の皂市下層文化との関連性も指摘され、粘土片貼り合わせ法を用いるという製作技術、丸底釜（罐）、圏足盤、双耳罐と鉢が主体であるという器種構成、縄紋、刻劃紋などの紋様構成、そして器形についても類似性が認められる（焦2006）。

このように河姆渡文化あるいは河姆渡文化以前の新石器文化が明らかになると同時に、河姆渡第３期・第４期は不完全な統計資料とされながらも40ヶ所以上あり、寧紹平原に広く分布するようになる（王・劉2005）。

象山塔山遺跡は1988年に発見、試掘調査が行われた後、1990年に第一次調査、1993年に第二次調査が行われている（浙江省文物考古研究所他1997）。下層文化は河姆渡遺跡第２層と基本的に相同し、墓葬40基が確認されている。

これらの墓葬については、副葬土器や墓の分布や方向から３組に区分されており、これらの関係も検討されている。こうした塔山下層墓地について、河姆渡文化や馬家浜文化との相違を認めて、独立した塔山文化を設定する見解もある（蒋1999）。

そして、塔山遺跡は下層文化以後、崧沢文化にほぼ相当する中層文化、良渚文化に相当する上層文化を経て、商周時期の文化層が堆積する複合遺跡である。

また、奉化名山後遺跡は1989年と1991年に発掘が実施された（名山後遺址考古隊1993、河姆渡文化課題組1999）。12層の文化層が堆積する複合遺跡で、12層～10層は河姆渡第２層、９・８層は河姆渡第１層、７～２層は良渚文化に相当する。

３．杭州湾南岸出土の多角口縁釜

次に、殻坵頭遺跡の出土遺物との比較として多角口縁釜について、出土釜全体の様相から、多角口縁釜自体の形態、紋様をとりあげ比較検討してみたい。

まず、河姆渡遺跡第３期では復元された釜32点の内、多角口縁は２点であるが、破片では釜1271点があり、その内口縁部のあるものでは、このタイプが数量的に２位を占めるとされる（第３図３）。第３期では釜の形態的な種類も多く、殻坵頭遺跡でみられた「く」の字状口縁以外の形態も含まれている（同７・８、10～13）。また鼎も足部について78点の破片が出土している。多角口縁釜は「く」の字状口縁で粗い縄紋が施されている。なお河姆渡遺跡においては第４期にも多角口縁釜がみられる。

寧波八字橋遺跡の出土釜には「く」の字状に多角口縁をもつ釜（第４図１）とそれ以外の器形の（同２・３）も含まれているが、出土数も含めて詳細は不明である（林1979）。なお、鼎も足部が出土している。

第３図　河姆遺跡第３期出土釜
（原図：浙江省文物考古研究所他2003）

第４図　八字橋遺跡出土釜
（原図：林士民1979）

塔山遺跡下層では復元された釜15点の内２点であり、同遺跡でも「く」の字状口縁以外の釜を含み器形は多様であり、鼎も出土している（第５図）。多角口縁は「く」の字状口縁で縄紋が施されている（同８・９）。

名山後遺跡について出土数は不明であるが、釜には鉢形もあり（第６図４）、鼎の出土例もある。多角口縁釜は「く」の字状口縁であり、やはり縄紋が施されている（同１）。

また、舟山群島の白泉遺跡からも多角口縁釜が出土している（王・陳1983）。釜の出土量は不明であるが。図化された２点は「く」の字状口縁をもち、内１点が多角口縁であった（第７図１）。

以上のように、河姆渡遺跡の多角口縁釜は第３期と第４期に出土し、その年代は前述したように第３期が今から6000年～5600年前、第４期が今から5600～5300年前とされる。その他の出土遺跡はほぼ河姆渡第３期に相当する。

片刃石斧や釜、支脚などの類似性については、ここでは一先ず保留にしたとしても、多角口縁は特殊な形態であり、他の東南中国においては類例がみられないことから、殻坵頭遺跡の「く」の字状口縁をもつ多角口縁釜の系譜として、河姆渡第３期に杭州湾沿岸の寧紹平原から舟山群島に広がる文化要素の波及が想定され、これは当該時期における沿海地域の文化交流を示唆するものとして注目される。そして、この年代は殻坵頭遺跡の放射性炭素年代値ともほぼ一致しており、ここに紀元前４千年紀の南中国沿岸における地域間交流を示すものと考える。

ただし、殻坵頭遺跡の多角口縁釜・罐には肩部、あるいは腹部に貝殻紋が施されており、今後、器形と紋様の相関関係を含めて、出土土器の詳細な観察にもとづく比較検討も必要であろう。また、同時期、寧紹平原から舟山群島の諸遺跡では煮沸土器にすでに鼎がみられることから、殻坵頭遺跡とは器種構成が異なる点も注意しなくてはならない。

第５図　塔山遺跡出土釜・鼎
（原図：浙江省文物考古研究所他1997）

第６図　名山後遺跡出土釜・鼎
（原図：名山後遺跡考古隊1993）

第７図　白泉遺跡出土釜（原図：王・陳1983）

第８図　塔山文化の分布（原図：蔣1999）

４．地域間交流をめぐる問題

南中国沿岸にみられる多角口縁について、世界の口縁部突起土器の分布を検討した伊藤慎二（2006）は、「縄文文化と地理的・時期的に近接する地域」として注目しながら、その来歴について河姆渡文化第１期にみられる口縁部・胴部に付加された多角状の「鍔」が次第に転化したものではないかと指摘している。

蒋楽平（1999）も多角口縁釜を塔山文化の特徴とし、その多角状のつくりが河姆渡文化における釜の胴部や盤の口縁にみられることを指摘している。さらに塔山文化の分布について南は象山半島、東は舟山群島、西は浙中丘陵区にいたる範囲としている（第８図）。

そして、殻坵頭遺跡と杭州湾沿岸に共通した多角口縁釜について検討してみると、杭州湾南岸の遺跡では釜の形態が河姆渡第１期以来の継承関係をもちながら、「く」の字状口縁以外を含む多様な形態であるのに対し、多角口縁釜はすべて丸底の「く」の字状口縁であるという共通性を有している。ただし、舟山群島の白泉遺跡においては他の杭州湾沿岸と共通して鼎がみられるが、殻坵頭遺跡のように釜の形態は「く」の字状口縁に限定されている点は杭州湾沿岸においても、多角口縁釜を含む釜全体の様相の差を示す上で注目される。

とくに釜が煮炊きに関わる土器として生活必需品であることを考えると、その形態のバリエーションのあり方は生活様式、遺跡にみる居住の定着性にも関わるのでなないだろうか。

実際、遺物包含層の堆積から遺跡の継続性を考えてみると、杭州湾南岸の遺跡は当該時期以後の文化層の堆積が重層する複合遺跡であることから遺跡にみる居住の継続性は長いものと判断される[4]。一方、舟山群島の白泉遺跡については試掘調査で詳細は不明であるが、遺物包含層は厚さ10～35cmとされていることから単純遺跡の可能性が高いのではないだろうか[5]。

紀元前４千年紀の地域間交流として、沿海ルートで福建沿海地域まで遠距離に及ぶにあたって、受け入れ側においては交流を示す要素は断片的で限定され、分布状況も散発的であることが特徴であり、後続時期に継続しないという時間的な限定も認められる。しかし、こうした広がりを示す背景として、発信元である杭州湾南岸においては地域内の隣接地域間の交流が活発であったと考えられる[6]。

そして、海を越えて舟山群島の白泉遺跡にも多角口縁釜を含む同時期の文化の広がりが認められる。しかも、白泉遺跡では多角口縁釜などの出土釜が器形的に限定され単純であり、遺物包含層が薄い点は遺跡における居住の定着性にも関わるものとして、杭州湾南岸という地域内の動向の差を示すものとして注目される。これが島嶼域における生活様式の差かどうか、杭州湾南岸ではすでに稲作農耕が行われていたと考えられるが、島嶼域の生業活動について出土石器などの他の要素の検討が必要であろう[7]。いずれにしても同時期に杭州湾南岸内において、島嶼域をとりくむように頻繁な海上を移動する交流が行われていたのではないだろうか。

こうした海上を舞台とした交流を実現するために海上交通工具としての丸木舟の存在が注目され、これまでにも先行時期に帰属する河姆渡遺跡（第９図１～３）や慈湖遺跡出土の木製櫂が知られている。こうした木製櫂の出土例や杭州湾対岸の舟山群島においても新石器時代遺跡が存在することから頻繁な海上交通が指摘されている（林1990）。そして、紀元前5000年よりも年代が遡る跨湖橋遺跡において丸木舟自体の出土例が確認されるようになった（同４）。船体は松製で長さ5.6m残存し、船首は幅29cm、船首から25cm離れたところから幅52cmになる。船体には大きな黒炭面や黒焦面が確認されており、丸木舟製作において火で焦がしてから刳りぬいたと想定されている（浙江省文物考古研究所他2004）。

その後、紀元前2千年紀になると福建沿岸においても沿海地域間の交流は内陸部もとりくみながら面的な広がりを示している。その分布範囲は閩江下

第９図　丸木舟関連出土資料

（１～３：河姆渡遺跡第１期　原図：浙江省文物考古研究所他2003
　　４：跨湖橋遺跡　　原図：浙江省文物考古研究所他2004）

流域を中心とし、南は厦門付近まで、北は浙江南部にまで及び、浙江南部では飛雲江流域など内陸側の丘陵地帯にも広がりをみせている（後藤2007）[8]。

まとめ

本稿では紀元前４千年紀における福建沿岸にみられる長江下流域の要素について、舟山群島という島嶼域を含む杭州湾南岸の新石器文化が頻繁な地域内交流を形成していたことにより、その流れが散発的ながら福建沿岸にまで及んだと考えた。こうした状況は先史時代における海を媒介とした地域間交流を復元するにあたって、地域内交流の活発な動きから時期ごとに広がりをもつ沿海ルートによる重層的な文化の動きを抽出することが重要であり、その上で地域間交流の様相と地域文化の動向を比較することが必要であると考える。

筆者は琉球列島の先史文化と周辺、とくに東南中国および台湾との文化関係についても検討してきたが（後藤編2007）、その中で、紀元前２千年紀に東南中国沿海地域において重層的な地域間交流が形成されていたことに着目し、同時期の台湾や琉球列島の動向に注意した。その際には紀元前2千年紀という殷系文化の成立と周辺への影響という時代性を考慮した。本稿でも沿海地域の文化の広がりにおいて、まずは紀元前４千年紀の文化の発信元における活発な地域内交流の状況を捉えたが、今後、さらに自然環境の変化も含めてその時代性も考慮して、南中国沿岸の先史文化の動きについて通時的にみていくことが必要であると考える。

註

（１）報告書によると貝殻を用いた施紋は確かに河姆渡遺跡第１期ではみられるが、当該時期の第３期では第２期に継続してさらに土器の紋様が減

少するとされ、無紋が多くなり、釜でも紋様は縄紋、籃紋、弦紋や斜線紋が拍印されているにすぎないようである。

（２）郭素秋（2000）も、台湾の縄蓆紋土器について言及する中、粗縄蓆紋土器を主体とする大坌坑文化の系譜について対岸の大陸部との比較を行い、河姆渡文化との関わりについて検討している。

（３）金門島の金亀山遺跡（陳1997ａ・ｂ）の発掘による層序関係が注目される。1994年に試掘調査が実施され、幅10cmごとの人工層位（Ｌ１～Ｌ９）が設定され、Ｌ１～Ｌ３から細縄紋、Ｌ３・Ｌ４から貝殻紋、Ｌ５以下から無紋土器が出土している。報告では同遺跡の年代を今から約6400年～3400年前とし、年代的に幅があることを指摘している。また、1997年に第２次調査、2004年に第3次調査が実施され、後者では271点の土器片が出土し、無紋土器片が多数を占め、縄紋は31点に施されている。器形は罐と鉢である（陳2007）。こうした調査状況から、金亀山遺跡も含む復国墩遺存は大坌坑文化の祖形の一つとして、年代も紀元前4000年をさらに遡ると位置づけられる。

（４）閩江河口対岸にある海壇島における遺跡の分布状況は興味深い。同島では当該時期に属する遺跡が殼坵頭遺跡も含めて５ヶ所で確認されているが、基本的に殼坵頭類型に属する遺物のみが採集され、現時点では後続する新石器時代後期の曇石山文化期の遺跡は未確認である。しかし、殼坵頭遺跡において紀元前2千年紀に属する印紋陶が当該時期より上層から出土し、道端の断面に露出した貝層中において採集されたことが報告されており、また他に６遺跡で印紋陶が採集されている（福州市文物工作隊他1995）。こうした状況から紀元前２千年紀になると海壇島が東南中国の沿海ルート上に再びくみ込まれるようになることがわかる。

このように福建沿岸では遺跡の継続性において断続が認められるのに対し、杭州湾南岸の遺跡の層序関係は継続性が強く、前述した諸遺跡以外に寧波八字橋遺跡は河川工事によって1976年に発見、調査が実施され

ており、河の土層断面は耕作土（30～55cm）の下、文化層があり、上部の黄褐色土（20～30cm）、中部の灰色土（40～50cm）、下部の黒褐色砂層（30cm以上）が堆積し、地山に達していないようである。

（５）舟山本島に所在する唐家墩遺跡では試掘調査が実施されている（王他1983）。包含層も厚く、２層に区分されるが（第１層耕作土の下に厚さ88～94cmの第２層、その下に厚さ48～52cmの第３層が堆積）、その内容は比較的単純で、河姆渡第１層と相同し、当該時期に後続する良渚文化期に相当するとされている。時間的な継続が短いことが舟山群島の新石器時代遺跡の特徴といえる。

（６）山東長島県廟島群島の大竹山付近の海域で1983年、丸底釜が採集され、その器形と縄紋施紋は河姆渡第１期と基本的に同じであるとされる（王・劉2005）。こうした周辺地域へ拡散したと考えられる事例も、舟山群島も含む杭州湾南岸における地域内交流が盛んであったことを示すものとして考えたい。

（７）舟山群島の大巨島の孫家山遺跡は後続する時期であるが、良渚系の石製耕作具が出土している（王・陳1983）。

（８）こうした丘陵地帯の文化要素として石器群に着目すると、同時期の沿海ルートの交流は生活技術に関わる側面をもつ文化要素を含み、飛雲江流域の獅子崗遺跡の石器には打製石鍬、磨製片刃石斧、打製石刀などがある（浙江省文物考古研究所他1999）。そして、片刃石斧は東南中国沿海地域に広く普及しているばかりか、打製石器については石鍬、石刀ともに台湾との共通性も認められ、広範囲に及ぶ交流がその背景にあったと想定される。

引用文献

伊藤慎二2006「縄文文化の南の境界」『東アジア世界における日本基層文化

の考古学的解明』國學院大學
王海明・劉淑華2005「河姆渡文化的拡散與伝播」『東南文化』2005－３
王明達・王和平1983「浙江定海県唐家墩新石器時代遺址」『考古』1983－１
王和平・陳金生1983「舟山群島発現新石器時代遺址」『考古』1983－１
郭素秋2000「台湾の縄蓆文土器について」『東南アジア考古学』20
河姆渡文化課題組1999「二十年来河姆渡文化的認識與探索」『紀念浙江省文物考古研究所建所二十周年論文集』
後藤雅彦2007「東南中国沿海地域の先史文化と地域間交流」『地域の多様性と考古学』雄山閣
後藤雅彦編2007『紀元前2千年紀の南中国沿岸と琉球列島の考古学研究』（平成16～18年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書
焦天龍2006「論跨湖橋文化的来源」『浙江省文物考古研究所学刊』８
蒋楽平1999「塔山下層墓地與塔山文化」『東南文化』1999－６
浙江省文物管理委員会他1978「河姆渡遺址第一期発掘報告」『考古学報』1978－１
浙江省文物考古研究所他1997「象山県塔山遺址第一、二期発掘」『浙江省文物考古研究所学刊』
浙江省文物考古研究所他1999「浙南飛雲江流域青銅時代文化遺存」『東南考古研究』第２輯
浙江省文物考古研究所他2003『河姆渡』文物出版社
浙江省文物考古研究所他2004『跨湖橋』文物出版社
陳維鈞2007「金門金亀山貝塚遺址的重要性及其文化意義」『田野考古』11-１・２
陳仲玉1997ａ『金門島考古遺址調査研究』
陳仲玉1997ｂ「福建省金門島考古遺址調査」『国家公園学報』７（1-2）
名山後遺址考古隊1993「奉化名山後遺址第一期発掘的主要収獲」『浙江省文物考古研究所学刊』（建所十周年記念）

中村慎一1998「河姆渡文化研究の諸問題」『中国古代文明の原像－発掘が語る大地の至宝』

西谷大1997「中国東南沿岸部の新石器時代」『国立歴史民俗博物館研究報告』70

福建省博物館1991「福建平潭殼坵頭遺址発掘簡報」『考古』1991－７

福州市文物考古隊他1995「福建平潭島考古調査新収獲」『考古』1995－７

林華東1992『河姆渡文化初探』浙江人民出版社

林士民1979「浙江寧波市八字橋発現新石器時代遺址」『考古』1979－６

林士民1990「寧波沿海地域原始文化初探」『東南文化』1990－５